大友左兵衛督義統について

矢島嗣久

大友氏二十一代宗麟義鎮の嫡子二十二代左兵衛督義統（吉統）は、文禄の役で豊臣秀吉から豊後国を没収された。

義統は慶長五年に豊後入国を果たし、速見郡（別府市）の石垣原合戦で西軍石田三成方として東軍徳川家康方黒田如水孝高と戦って敗れ、配所先の常陸国で没した。

一　出生と生い立ち

大友義統は永禄元年（一五五八）閏六月十八日、父、大友氏二十一代義鎮（宗麟）の嫡子として豊後国、府内（大分市）に生まれた。母は義鎮の社奉行奈多鑑基（杵築市）の娘である。義統は幼名を長寿丸といい、通称は五郎と称した。

永禄五年（一五六二）五月、義統の父、義鎮は臼杵荘（臼杵市）丹生島に築城し、ここに移り住んだ。義鎮は、この頃入道して宗麟と号した。

天正元年（一五七三）十二月頃、宗麟は家督を十六歳の嫡子義統に譲ったが、実際は義統との領国共同統治を行っていた。

二　日向遠征

天正六年（一五七八）四月、宗麟は、嫡子義統を大将として三万の大軍で日向松尾城（宮崎県延岡市）の土持親成を攻め滅ぼした。義統は宇目の酒利（宇目町北東部）に本陣を置いた。

同年九月、宗麟は豊後臼杵から乗船して日向延岡付近へ向かう。義統は野津（大野郡野津町）に露営を敷いて、物資調達を担当した。十一月、宗麟は本陣として日向臼

杵郡務志賀（延岡市無鹿）で教会を建て、キリスト教的理想国家の建設に取りかかった。

十一月十二日、大友軍が日向高城（宮崎県児湯郡高鍋町）で島津軍に大敗し全軍退却する。これは日向耳川の戦いといわれている。

天正九年（一五八一）十月、宗麟・義統父子は、肥前の竜造寺隆信に味方する豊前彦山（英彦山、大分県山国町と福岡県添田町との境）を焼き討ちにする。

天正十四年（一五八六）三月、宗麟は大坂へ行き、豊臣秀吉に謁見して、島津軍豊後侵入の救援嘆願をおこなった。

三　島津軍豊後侵入

天正十四年八月、秀吉の命令により仙石秀久、長宗我部元親・信親父子らが四国の兵を率い、秀吉軍の先遣隊として豊後の沖ノ浜（現大分市）に上陸する。

同年十月中旬、島津義弘は肥後方面から、同弟家久は日向から豊後に侵入した。

十二月七日、島津家久軍が大分郡鶴賀城（大分市戸次）を攻め、十日には城主利光宗魚が戦死する。十二日に仙石秀久、長宗我部元親・信親父子、大友吉統軍が鶴賀城を救援するため戸次川（大野川）を渡って戦い大敗する。元親の嫡子信親二十二歳は中津留河原で戦死した。

吉統は高崎山城（大分市）にのがれてのち豊前竜王城（宇佐郡安心院町）まで敗走した。

島津軍は大友四国連合軍を追って府内（大分市）に侵入した。

島津軍との戦いについては、秀吉から「合戦はするな」と命じられていたにもかかわらず、それに背いての敗戦であり、これは大友氏の豊後除国の遠因となった。

天正十五年（一五八七）四月、義統は妙見岳城（宇佐郡院内町）において、黒田如水孝高の勧めでキリスト教の洗礼を受けた。教名はコンスタンチノという。

同年五月、秀吉は義統に豊後一国を与えることを内示する。義統三十歳。

五月二三日には、義統の父宗麟が臼杵で熱病にかかり、津久見に帰って死去した。享年五八歳。墓は津久見市ミウチにある。

同年六月、秀吉が豊前京都、中津、上毛、下毛、宇佐六郡十二万五千石を黒田如水孝高に与える。

翌十六年（一五八八）二月、義統は上洛して秀吉に謁見し、三月に秀吉の奉請で朝廷から従五位下豊後侍従を与えられる。同年四月には秀吉の吉の一字を与えられて吉統と改名した。

四　豊後除国

文禄元年（一五九二）二月、大友吉統が唐入り祈願のため豊前佐田善神王宮大般若経六百巻を府内円寿寺（大分市上野丘）に納めた。現在、この般若経は同寺の資料館に保存されている。

同年三月、吉統は秀吉の命令で六千名の軍兵を率いて三番手、豊前中津城の黒田長政（黒田如水孝高の嫡子）の指揮下に入り、朝鮮へ出兵する。

翌文禄二年一月七日、平壌を守備していた小西行長が鳳山城の吉統に救援を求めたが、吉統は軍議のため黒田陣に行き不在だった。そのため、大友軍は行長を救援せずに京城まで敗走してしまった。

同年五月一日、秀吉は吉統を罰し、豊後国を没収して蔵入分（秀吉直轄地）として、身柄を大友の旧敵にあたる毛利輝元（毛利元就の孫）に預け周防山口の本国寺に幽閉し、嫡子義乗は五百人扶持として肥後の加藤清正に従わせる。

吉統はこの年に入道して宗巌と称し、中庵と号した。吉統の正室は、大友氏庶流吉弘鑑直（のち鑑理）の娘で、文禄二年（一五九三）十一月時点では豊後に在住しており、その後実家吉弘家のもとにあったと考えられるが、文禄四年十一月に死去した。

文禄二年の豊後除国後、吉弘家の当主吉弘嘉兵衛統幸は、従兄弟の柳川藩主立花宗茂（統虎）のもとに仕えていたため、吉統の正室が持参した多くの大友文書が柳川の立花氏のもとに保管されている。

文禄三年（一五九四）九月、吉統は山口から常陸国（茨城県）水戸の佐竹義宣の領地に移され、嫡子能乗は江戸の徳川家康に預けられた。

慶長三年（一五九八）八月、豊臣秀吉が没した。そのため、朝鮮在陣軍を撤退させる。

翌四年十一月、大友吉統が放免されて江戸在住の嫡子義乗のもとに同居していたが、父子上洛して後陽成天皇に硯箱などを献上する。

五　関ヶ原の戦い

慶長五年（一六〇〇）八月中旬、毛利輝元は吉統の二男、五歳の長熊丸（正照）と一族の久我通春を人質とし、吉統が西軍に対して違反しない旨の誓書を提出させた。

正照の母は伊東甲斐守の娘で、泉州堺の生まれである。

八月下旬、毛利輝元は豊臣秀頼（秀吉の嫡子）の命令により大友吉統を豊後に入国させるため下向させる。吉統は周防大畠（山口県柳井市東方）から出帆し、途中上ノ関（柳井市南方）に到着した。

吉統は豊臣秀頼から豊後一国の安堵を得たことにより、西軍に与する決心をした。正照の乳母岐部夫婦に、「この身こと、ふとふと、ふんこへ、くたり候（自分ははからずも、豊後へ入国することになった）」と申し送っている。

吉統の嫡子能乗は、吉弘鑑直（のち鑑理）の娘を母として生まれた。能乗は、慶長五年七月の越後上杉景勝攻めに際し、東軍徳川秀忠（のち徳川氏二代将軍）の勢に加わって武功をあげた。

中津城の黒田如水は使者を上ノ関まで行かせて、吉統に関東方に加わるよう説得したが、吉統は承知せず船路で豊後へ向かった。

吉統の重臣吉弘嘉兵衛統幸は、従兄弟の筑後柳川藩主立花宗茂に仕えていたが、江戸の能乗に仕えようとして小倉から乗船し、東行していた。途中、統幸は上ノ関で吉統と会い、関東方に加担するよういさめたが吉統は聞き入れず、止むなく統幸も吉統に従い豊後入りすることとなる。

統幸は、吉弘鑑直（鑑理）の孫にあたるため、大友吉統の正室は統幸にとって叔母と甥の関係になる。

九月十五日、岐阜県南西部の関ヶ原で、石田三成の西軍と徳川家康の東軍とが天下を争い合戦を行った。

豊前中津城主黒田如水孝高の嫡子長政や細川幽斎藤孝の嫡子で豊後の木付城主だった忠興らは、東軍徳川方として関が原に参陣中であった。

合戦は、西軍方小早川秀秋の裏切りで東軍が大勝し、天下分け目の戦いは一日で終わった。

小早川秀秋は、筑前名島城主（福岡市）で秀吉の正室北の政所の兄の子にあたり、小早川隆景（毛利元就の三男）の養子である。

六　豊後入国

大友吉統は慶長五年（一六〇〇）九月八日夜、木付（杵築市）の沖を通り高崎山の沖で夜を過ごし、翌九日浜脇に上陸して、立石村古屋園（別府市南立石本町）に陣を敷いた。本陣は庄屋古屋彦助宅である。

吉統の旧家臣田原紹忍親賢と宗像掃部鎮続は、朝鮮出兵時には留守居役だったため改易をまぬがれ、竹田岡城主中川氏の付け家老となっていたが、吉統の豊後入国に際して別府立石へ馳せ付け、吉統の陣に加わった。

しかし、大友軍は「総勢九百には足らず」という情勢であった。

南立石村古屋園には吉統と田原紹忍親賢とが本陣を構え、右翼坂本村（観海寺、杉ノ井ホテル付近）には吉弘嘉兵衛統幸が、左翼御堂ケ原（堀田付近）には宗像掃部鎮続が陣を敷いた。

田原紹忍親賢は、吉統の父宗麟義鎮の正室奈多氏の兄（一説には弟）にあたり、奈多鑑基の二男で田原親資の養子となり武蔵田原氏を継いだ。

九月九日、豊前中津城主黒田如水孝高は三千余の軍勢を率いて豊後へ向けて出陣した。高森城（宇佐市）をへて、翌十日には高田城（豊後高田市）に到着し、使者をもって城主竹中重信へ出陣を促した。

その夜、如水軍は赤根峠（国見町）に野営した。

十一日、大友吉統軍の一隊が人質を開放しようとして城代松井康之・有吉立行らが守る木付城（城主細川忠興、杵築市）攻めを行った。それを知った如水は軍を二つに分け、如水本隊は富来城（国東町）攻めを、時枝平太夫、井上九郎右衛門の別動隊二千人は森・小田原（共に豊後高田市）をへて木付城の救援に向かった。

木付城攻めを行った大友軍の別動隊は人質を開放することができたが、城を攻め落とすことができず、（日出町）真那井の港から海路退却した。

九月十三日、木付城代松井、有吉、黒田軍の井上、時枝連合軍は、鉄輪、立石（共に別府市）へ向かって出陣することになる。

七　石垣原合戦

九月十三日、東軍の木付軍は実相寺山（別府市）に、援軍の黒田方、井上九郎右衛門、野村市右衛門らは西側の賀来殿山（現ルミエールの丘）に、時枝平太夫らは中間の谷間にある犬の馬場に陣を取った。

大友方は立石の高台から下り、北へ向かって境川の左岸に陣を敷いた。大友吉統が腰かけて戦いの采配を振るった「大友こしかけ石」、別名「屋形石」は現在行くえが分からないが、現在「館石」というバス停が扇山町の東南側、西別府病院の西側にある。

吉弘統幸、宗像掃部鎮続軍が犬の馬場まで攻め寄せ、黒田方の久野次左衛門らを討ち取り、一時大友方が優勢であった。しかし、数に勝る黒田、細川連合軍は大友軍を反撃し、吉弘嘉兵衛統幸、宗像掃部鎮続、竹田津志摩守一木、吉良伝右衛門統栄など大友方の有力な武将を討

立石村古屋園　大友吉統本陣跡

ち取り、戦いの大勢が決した。

この日、黒田如水は富来城（国東町）及び安岐城と戦ったあと、日出の頭成（日出町豊岡）まで進んできた。そこで石垣原合戦の勝利を知り、その夜は実相寺山に陣を取った。

吉統は生き残った田原紹忍の説得で、黒田如水への降伏を決意する。

如水は首実験のあと、立石陣の大友吉統の降伏を認めた。吉統は剃髪染衣の姿となり、黒田方母里太兵衛の陣所に主従十人で出頭した。吉統四十三歳。

八　合戦以後

慶長五年（一六〇〇）十一月、徳川家康は、中津の黒田長政を筑前五十二万石に、木付の細川忠興に豊前三十九万石に封じた。

筑前名島（福岡市）城主黒田長政の父如水孝高が大友吉統を従えて大坂へ行き、徳川家康にまみえる。

慶長六年に家康が大友吉統を近江に追放し、翌七年には出羽湊（秋田県）城主秋田実季に預け、翌七年には秋田実季の転封に従って常陸国（茨城県）宍戸に移された。

慶長十年（一六〇五）七月十九日、大友吉統が常陸（茨城県）の配所で死去する。享年四八歳。諡号は法鐘院殿中庵宗巌大禅定門という。

大野郡野津町福良木にある千光院の左手に大友義統と嫡子能乗の法名が一緒に記されている小さな供養墓が建てられている。野津町福良木は町の北東方にあり、県道川登臼杵線の東南側、名塚川沿い付近をいう。

徳川家康に預けられ秀忠に仕えていた大友吉統の嫡子義乗は、後に剃髪して幽哲と号し、慶長十七年（一六一二）七月に三六歳の若さで江戸牛込で死去した。義乗の長男は早世していたので、家督は次男の義親が継いだ。しかし義親も元和五年（一六一九）八月、二七歳で病没した。

義親には子どもがいなかったので、領地三千三百石は没収され、大友の家名は吉統の三女於賢が継いだ。於賢は吉統の二男正照の三男義孝を養子に迎えて大友家を継がせた。義孝は高家に列せられ、禄高千石を与えられた。義孝以後、大友家は高家として幕末に至る。高家とは、

江戸幕府の職名で、幕府の儀式・典礼、朝廷からの使節に対する接待等をつかさどる家柄をいう。

大友家累代の墓は、大分市金池町五の万寿寺の一角にある。

宗麟の正室（奈多氏）、義統の母の墓は、臼杵市福良平清水（ひらそうず）の大橋寺に葬られている。大橋寺は臼杵川に架かっている万里橋と住吉橋との中間で臼杵川沿いにある。

系図

大友氏系図

二十代 義鑑 ― 二一代 義鎮（宗麟） ― 二二代 義統（吉統） ― 義乗
　　― 正照

吉弘氏系図

九代 鑑直（鑑理） ― 十代 鎮信 ― 十一代 統幸 ― 十二 政宣
　　― （高橋氏） 鑑種 ― （立花氏） 統虎（宗茂）
　　― 女（大友義統室）

引用参考資料

豊後大友物語　昭和四八年　大分合同新聞社
大分の歴史　四　昭和五三年　大分合同新聞社
大分の歴史年表　昭和五九年　大分合同新聞社
大分県の歴史　昭和六二年　山川出版社
大分県史　中世篇Ⅲ　昭和六二年　大分県
大分県歴史人物事典　平成八年　大分合同新聞社